
僕とお嬢のベタスト物語

伊藤勇作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とお嬢のベタスト物語

【Nコード】

N7791F

【作者名】

伊藤勇作

【あらすじ】

非合法超法規軍。通称BLACKFORCEに所属している少年、久遠時朱鷺は色々と（主に上司のせいだが）あつてとある財閥の少女の護衛を任された。さてどうなる事やら未だに作者にも検討がつかない。ラブあり、コメディあり、シリアスあり、アクションあり、魔法あり、SFありとこの時点でもうカオス！だけどそれがいいんだ！！そんな感じの面白さで連載中！＊注意：この作品は文系グダグダさんの『自称予測不可能のベタSTORY』を参考に書いてあります。（作者承諾アリ）

プロローグ：前編（前書き）

このプロローグ・前編はこれと言った重要な話しではないので、プロローグ・後編から読んでもかまいません。

プロローグ：前編

青々と生い茂る森林の奥。

そこに古い……って言うか、かなりボロい建物があった。

その奥の部屋には一人の少女が眠っている。

年齢は16歳くらいであろう、美人よりは可愛らしいと言う言葉が似合いそうな少女だ。その身なりは誰がどう見たってお金持ちのお嬢様だと分かる。

そしてその少女の部屋の周りには、これまた分かりやすいくらいの悪人面をした人物達がいた。

そんな彼らを双眼鏡で見つめている少年がいた。
見た感じまだ幼いという事は分かる。

多分年齢は14〜16歳くらいだろう。

そんな少年がこんな所で何をしているのかと言うと……

「こちらフェイス4・目標を確認した」

トランシーバー

分かりやすく言えば無線機。

それに向かって誰かと連絡を取っている。

「フェイス4・状況を報告しろ」

その無線機から図太い……とまでは言わないが、歳相応の年齢を感

じる男性の声がした。
少年はそれにかまわず喋り続ける。

「現在主犯5人組の男達は、放棄された建物に潜伏中。3人は外に出て警戒を、残り2人が少女を監禁している部屋の前にいる模様」

「そうか……………」

しばらく声がしなくなった。
それから二三分が過ぎた時。

「では任務を伝える」

返事が返ってきた。

「フェイシス4．はこれより夜になるまで待機。そして21:00から少女奪還のため、敵の鎮圧を命じる」

「了解」

「なお、この作戦において目標の救出を優先とする。以上だ、質問はないか？」

「増援は？」

「増援は送れん。現在こちら手も手が離せない状況だ」

「では自分一人で任務を遂行せよと？」

「そういうことだ」

「…………了解。では任務続行に移ります」

「うむ。くれぐれも人質に怪我がないように十分気をつける」

そして無線はと切れた。

しばらくその途切れた無線機を見つめながら、少年はやるべき事をするために移動を開始した。

そして時刻は21:00.

任務を遂行する時間となった。

〈少年視点〉

敵に見つかからないように草陰から見据える。

敵は昼間と同じ5人。

全員外に出て、暢気に酒を飲んでいる。

どうやら追撃が来る事を考えていないようだ。

「これはやり易いな」

敵が油断をしているという事は、こちらにとって都合がよい。

「この調子だったら余裕だな」

そして場所を移動してさらに近づく。

「さて人質の様子はどうか……」

再度人質の位置を確認する。

もし移動していたら、場所を移動しなくてはならないからだ。

先ほどまで部屋に閉じ込められていたはずだ。

双眼鏡をのぞき目標を探す。

「……いた」

人質は先ほどと同じ奥の部屋に監禁されているようだ。

「人質の位置は変化なし」

今の状況を考慮しつつ目標を救出するには……

「初期の作戦通りにいくか」

そう思いながら、大きめの黒い鞆から大型のライフルを取り出す。

このライフルは、セミ・オートマチック方式のスナイパーライフルだ。

名は『00-XM109βノトロンベ』まだ試作段階の最新型モデルである。

因みに、セミ・オートマチック方式というのは……

簡単に言えば自動で薬莢が入れ替わるものだ。

一回引き金を引いたら、一発だけ発射してすぐに次弾が撃てる状態になる。

これによっていちいち薬莢を取り出す必要はないし、なにより次の攻撃に瞬時に備えることが出来る。

余談ではあるがこれと同じ意味でフル・オートマチックと言う言葉がある。

このタイプは引き金を引いた分だけ連射し続けるタイプのものだ。これらは便利な機能を有しているが、難点な部分もある。

オートマチックのタイプは操作は簡単なのだが、構造が複雑で故障しやすく、誤操作により予期せず発射される暴発の危険があるのだ。本来、そんな事が起きないようにするため安全装置をつけているのだが、僕が持つ『00-XM109β/トロンベ』は試作型として作られたもので、安全装置が取り付けられていない。

それにリミッターがついていない事により、本来の製品より圧倒的に性能が高い。

その中で威力と距離は桁違いにズバ抜けており、その分負担も大きいがもう慣れたので問題はない。

「この距離なら麻酔弾でいけるな」

そう思い狙撃銃に弾を込める。

この麻酔弾は当たれば一時間ほどで目を覚ますが、1〜2ヶ月ほどは動けないように全身を麻痺させる神経毒入りのものだ。

これを作った人物ははっきり言って、えゲツない奴だと思う。

「よし」

銃を構えてスコープを覗き、相手の位置を確認する。

先ほども言った通り敵は5人。

それも素人だ。

もし一人でも戦闘経験者がいれば、相手は酒など飲まずに警戒するはず。

警戒を怠るという事は死につながる。

そう言った事を経験者は知っているからだ。

「……………ふう」

弾は10発。

敵は5人。

一応予備弾が10発ほど残っているが、入れた弾だけでも余裕で足りる。

けど、撃った弾は1発たりとも外してはならない。

最初の1発外せば、相手は敵襲に気付いて物陰に隠れてしまう。

そして最悪の場合、人質を盾にとられてしまう可能性があるからだ。

それに初めの1発を相手に当てれば相手（素人）は確実に動揺する。

そして仲間の仇をとるために、僕を探そうとして物陰には隠れずに動いてしまうだろう。

そうすれば一氣にいける。

だから確実に……………仕留める。

「……………」

集中力を高め、風を読み、動きを読み、狙いを定めて…………

「……………っ」

【ダァン！】

引き金を弾いた。

「げハッ!？」

よし、まずは一人目。

「な、なんだ!？」

「どうした!!」

「おい!しっかりしろ!」

敵は仲間が撃たれたことで動揺いる。

予想通りだ。

そして続けざまに3発打ち込む。

「ぐはっ!」

「あがっ!」

「がはっ!」

似たような台詞ばかり言う奴らだなーと思いつつも、3発とも見事に命中する。

……残り一人。

「ど、何処から撃ってやがるんだ!?!」

最後の一人は慌てて俺を探すが、当然見つからない。

……まあ、もともと見つかるような位置にはいない。

相手からここまでの距離はおよそ700m。

狙撃するにあたって、距離は重要なものだ。

それに位置関係も重要であり、気付かれないようにする事も大事だ。僕が居る所は周りに木や草生い茂っていて、丁度よい具合に僕の姿は遮られている。

それに現在は夜という状況であって……

「貴様が俺を見つけるには不可能だ」

【ダァン！】

「グハツ！？」

そして最後の一人も倒れた。

「…………ふう、これで全員だな」

目標の5人を全て鎮圧。

あとは人質の救出をすればいいだけだ。

「任務クリア……………つてとこだな」

空を見上げならそつと呟いた。

星が綺麗に輝いている夜空だった。

プロローグ：後編（前書き）

ここからがこの話しの始まり（要）です。

プロローグ：後編

おれが所属している組織。

通称BLACK FORCEは世界でも有名な警備会社である。

ただしこれは表の話であって、裏では全世界規模のテロ組織、独裁国家軍事組織、非人道貿易組織、異世界からの不法侵入者から、表&裏側からの特殊人物護衛、要人護衛、またはそれらに対しての救出任務など様々な依頼をこなしている非合法超法規軍の組織だ。まあ、何でも屋みたいなものだと考えればいい。

この組織は分野ごと分かれており、『殲滅、遊撃、突撃、破壊』など攻撃に特化した部隊と『保護、救出、迎撃、護衛』など防御に特化した部隊がある。

まあその分野でもさらに分別されているのだが、僕が所属している部隊は『イージスの盾』と言われており、防御部隊の中でもトップクラスの部隊である。

その中で僕は主に救出任務を担っており、階級は中尉。コールドサインは『フェイス4』。

もう一度言っておくが、オレの主な任務は救出任務だ。

………なのはどうしてこんなことになったのだ？

「課長。これはどういった用件だコラ。返答次第じゃただじゃおかねえぞ」

先程、救出任務が終わり、報告書を出しに来たオレに次の任務が伝えられた。

まあ任務を受け取るのには問題ない。一応仕事だしな。
だが、その内容は僕が思っていたものと違ったのだ。根本的にな。
でだ。その内容というのは……

「どうしてオレが護衛任務！それも女のなんだ！？」

そう、オレの任務はとある高校生……それも女の護衛になっていた。
しかも内容は長期間に亘つての任務ではないか！

「お、落ち着け！そう凄むな！これには一応訳があるんだ」

課長は焦りながら、オレに説明する。

「これは上からの命令でな、どうしてもお前にやって欲しいという
事なのだ」

「上から？」

するとまさか。

「察がいいな。お前が考えている通りの人物だぞ」

為るほど、あいつからか。

「課長。回線をつないでもらえませんか？」

「そついうと思って、既に彼とはつながってるよ」

そう言って渡したのは一本の受話器。

「ありがとうございます」

礼を言うオレに対し課長は苦笑しながら。

「この前のように壊すなよ」

と言いつて出て行った。

実は前回も似たような件があり、あの時は断ったと同時に受話器を叩き壊してしまった。

無論、受話器代は給料から差っ引かれたけど。

「もしも『はっはっはー！！どうしたのかね朱鷺君！？』いきなり人の話を遮るな！」

受話器から聞こえるやけにテンションの高いおっさんの声。

こいつの名は須賀田参蔵。すがたさんぞう

この部隊『イージスの盾』リーダーであり……

『いいじゃないか朱鷺君！それとも我が愛しの息子と呼んで欲しいのか！？ならぜ』いい加減にしろ、それ以上言うと本気で縁を切るぞ」……OK」

こいつとは親子の関係にあるのだ。不本意なことに。

まあ、親子といっても僕がこいつの養子に入っただけから形式上そうなっているだけであって……気付いたらこうなっていたのだ。

だからまあ義理の息子って感じだな。

不本意な事に、本当に不本意な事に！！

『おい。朱鷺君？全部言葉に出てるぞ。それは新手の嫌がらせか

？そうだったら私は少し悲しいぞ！』

おっと！どうやら心（本音）が口に出ていたようだ。
ってそうじゃない！本当の用件を聞いてねえよ！

「お前こそ嫌がらせか！？どうしてオレが護衛任務につかにゃならんのだ！」

『そうか！気に入ってくれたかね！！』

「テメーはトコトン人の話を聞かない奴だな。脳外科か耳鼻科にでも行け」

『と、朱鷺君！そんなに私の心配を！？う、うっ……私は親思いの息子をもって幸せだ！！』

だめだこいつ。話しが一切通用しない。

『とまあ、冗談はさて置き』

「冗談かよ！」

『私から一言。任務拒否は許さんぞ』

「……………」

【バキッ！】

つといかんいかん。この受話器には罪はない。危うく握りつぶしてしまう所だった。

ここは大人しく理由を聞かねば……

「……どうして任務の拒否は出来ないんですか？返答次第ではあなたの家は火の海だ」

『それって脅しだね！？怖い！リアルで怖いぞお！？』

違う。ただの憂さ晴らし。

『朱鷺君。私だって一応考えて言ってるんだ』

だったらその理由を言いやがれ。

『朱鷺君はまだ16歳。私の国、日本ではまだ学生と言う年齢だ』

だからどうしたこのヤロウ。

『私は色々考えた。朱鷺君がどうやったら普通の学生として生きていけるかを』

……なぜだろう。

いいことを言っているはずなのに、妙な違和感がある。

『そこで私は思いついた！任務をこなしながら学生気分を味わえる方法を！』

「……それがこの任務か？」

『そうだ』

……ふう。

「で？さつさと本音を言ったらどうなんだ？」

『あら？やっぱりばれてた？』

当たり前だ。

そんな胡散臭い演説を聴いているほどオレは暇じゃない。

『なら話しは早いね。実はこの任務、私の古い付き合いの親友からなんだよ』

……為るほど、だから僕を指定してのか。

「それだけが理由か？」

『いいや、それだけが理由じゃないよ』

だろうな。もしそうだとしたら他の奴にでも任務は務まる。

『彼女がいる場所はね、全寮制の学校なんだ』

「全寮制？」

『まあ簡単に言うと、学内での閉鎖された空間って言うのかな？とにかく、学校内だけならともかく、寮内までは大人は入れないからね』

「成る程、それだったら僕は可能ってことか」

『そう言うこと。朱鷲君は私の手札の中でかなり優秀なカードだらね。それに同年齢代では朱鷲君と…… 部署は違うけど、悠治君と飛鳥君だね。彼らも朱鷲君と同じくらい…… いや、ある意味それ以上に優秀だけど、緊急時の時のみだからね。長期の任務には向いてないよ。それに彼らをこっちに呼んだら後でとばっちりをくらうからね。主に私とこの組織が』

まあ確かにそうだな。

うちの組織（と言ってもこの部隊だが）にいるのはオッサンがメインだからな。

それとさっき言ったこの二人は現在この組織にはいない。

まあ部署が違うと言う理由もあるが、彼らは現在、学生として真面目に生活しているからだ。

だから彼らは緊急事態、または緊急出撃のときに来るメンバーとなっている。

…… まあ、彼らの恋人が和光院財閥と武藤財閥のお嬢様方つても理由だがな。

もし人事移動とかで彼らを転校させたら…… うん。ヤバイね。主にこの組織が。

そんな訳で、彼らをこの任務につかせるのは不可能だ。

一応、この組織にも女性の方がいるけど、部隊と部署が違うし僕は組んだことがないからどんな奴かわからん。

「でもそれだと、男の僕も寮には入れないんじゃないのか？」

『それは大丈夫だよ。あの学校は男女共用の寮だからね。といっても男子はそんなに多くはないよ』

「ふん。因みに男子の数って何人だ？」

『男子の数は全学年合わせて6人だ』

「少なっ!？」

全学年で6人は少なすぎる。

『はっはっはー。彼女が通っている学校はつい最近まで女子高だったからね。少ないのは当たり前さ』

「それだったら警備員とかもいるはずだろ？お嬢様の、しかも女子高だし」

『うん。一応、警備員やボディガード。戦闘員のメイドさんがいるらしいけど……』

「いや待て！ボディガードはわかるけど戦闘用のメイドってなんなんだ！初めて聞いたぞ!？」

『最近のお嬢様の高校では多いらしいよ』

んなことするか。

『それにね。彼女達は少し特別な子なんだよ』

「特別？」

『彼女達はね。現在権力争いの狭間にいるんだよ』

「……それで？」

『彼女達はその権力争いの立場で言えば第一継承者なんだ』

「だから彼女を狙おうとする人間がいると?」

『そうだよ。なんせ継承者が死ねば得するのは殺した人物だからね』

「成る程な」

そういう訳なら仕方がないか。

『引き受けてくれるかい?』

「不本意だがな、ここまで聞けば後には引けんだろ」

一応僕に回ってきた任務だしな。

『そう言うと思ってたよ。もうこっちでは編入の準備が出来てるから』

「わかった。で、任務はいつからだ?」

『出来れば早く……そう、明日にでも』

「場所はどこだ?」

『日本だ』

日本か始めて行く国だな。

『じゃ、任せたよ』

「任務了解」

そして僕は準備の為に部屋に戻った。

ミッション01：到着

Mission: 01

しりつていいい
私立帝栄学院。

日本国民なら一度は耳にしたことがあるというくらい有名な私立学校で、幼稚園から大学までエスカレーター式の一貫校だ。

この一貫校はなんのかというところどこに出しても恥ずかしくないようなお嬢様』を育てる一般庶民お断りの名門で、その敷地はかなり高く、学歴よりも家柄重視の徹底的なお嬢様学校だった。

『だった』と言うのは今年に入って、共学になってしまったからだ。まあ共学になるからと言って、本質が変わる訳ではない。

つまり、ここのお嬢様と同じく『名門家またはそれ相応の家柄をもつ男子』という条件に一致する人でなければならないのだ。

そのような条件で現在ここに在学している男子の数は6人。

女子生徒の一角にも満たない。

まあ簡潔的に纏めるとすると、この帝栄学園は家柄重視の名門校という事だろ。

「という事は聞いていたが……まさかこれほどとは」

学生になりすましての護衛は初めて……というか、学生と言う職業すら初めてなので、ここに来るまでに一般学生としての基礎知識をそれなりに頭に入れ込んできたつもりが……

その詰め込んだ知識は無駄と言うか、はつきり言ってこれは予想していなかった。

現在。朱鷺は正面の門をくぐりぬけ、帝栄学院の敷地内にいる。そこから少し後ろを振り返れば、二、三名の警備員と馬鹿でかい

重厚な門が鎮圧している。

自分が判断するかぎり、高さは10mを遥かに上回り、鋼鉄製の扉とコンクリートで覆われている。内部を通りぬけた感じから察するに、厚さは約5mはあるだろうどこかの城壁みたいだ。

「……………資料と現物とではこうも違うんだな」

因みに、彼が言っている資料とは一般的（普通）の高校のことであって、この常識外れの帝栄学院を参考にはならない。

「護衛の依頼。まずは校長室で確認しないと」

そして彼はさらに奥へと進んでいく。

……のはよかったのだが。

「……………なんだここは」

先へ進むごとに学校じゃなくなっているような気がする。
まるで別世界のファンタジー？

例えば、目の前にあるこの西欧の屋敷。

これを見れば誰だって何処かの美術館だと思うが、これは歴とした校舎だ。

その両サイドに立っている三角錐の塔らしきものはどこぞのお城にも見える。

これを見れば豪華な建物だなーと思うが、その建物が3つほどあるとはこれはいかに？

そして校舎から離れたところに、高く水飛沫を上げている噴水があり。

その奥の方にはゴシック式の時計塔と教会らしき建物が見える。

なんで時計塔や教会が校内にあるのかが不思議だが……まあセレブだからと言う事で理解しておこう。うん。そうでなければなんかやるせない気分になる。

ってか、この学校自体が問題だろ。

「……………はあ」

任務を受ける前からストレスがたまりそうだ。

「早く確認して休もう」

とりあえず、周りの光景を気にしないように目的地に向かう事が優先事項だった。

そして永き時間（精神的意味で）と道のりによって、やっと目的地の来客室に到着した。
途中で引き帰そうかなあ……と何度も思いながらも、素直にここまで来た自分を褒めたいくらいだ。

【コンコン】

と扉を軽くノックして。

「『イージス』から来た朱鷺と言うものですが…」

「……どうぞ、お待ちしておりました。中に入ってください」

カチャリと言う音と共に、返事が返ってきた。

「失礼します」

扉を開けて入るとそこには一人の老婆とメイド服を着た女性の方が居た。

老婆の方は妙齡だが、雰囲気で威厳とか品格とかそう言ったものが感じとられる。

メイドの方は……わからん。無表情で何を考えているか理解できない。

年齢は俺と同じ……いや少し上かもな。

それにこのメイド……かなりデキる。一般の人間とは明らかに異なる。

「ようこそお出でくださりました」

老婆は自分が座っていた椅子から立ち上がり

「私はこの帝栄学院の理事長をしております。菊池と申します」

ご丁寧^レに頭を下げて挨拶してくれた。

「……………」

隣のメイドはただじーつと俺を見ている。

ってかなんか睨まれているような……………気がしないでもない。
どっちかと言うと観察（？）されているのか。

まあそんな事より。

「…早速ですけど、これから自分は仕事の準備がありますので、資料の点検や、校内の地図、学校の制服、その他の必要品の支給をお願いできますか？明日からは自分もここの生徒として任務を務めますので……」

「わかりました。必要なものは一通り部屋に置いてあるはずなのでそれを使ってかまいません」

「ありがとうございます」

「では部屋のご案内を…明菜^{あきな}」

「…」

「朱鷺さんを部屋までお連れなさい」

「……………はい」

明菜と呼ばれたメイドは俺を一瞥しながら。

「こちらへどうぞ」

そう言って案内してくれた。

ミッション02：ゼロから始まる

Mission:02

「…こちらです」

案内された場所は学校の外れの方に立っている寂びた小屋だった。本来は教員の宿直の場所として使われていたのだが、今では使っていないらしく、ここならば誰も入らない為、適切な場所として案内された。

「意外と普通の部屋だな」

外見は古い小屋であったが、部屋の中は意外と普通であった。この学校の事だからもっと凄いのかと思っていたが、そうでもなかったみたいだ。

「ま、この方が生活しやすいな」

無駄に凝った部屋だと逆にくつろげないだろうし、なにもない方が一番落ち着く。

「…なにか用がありましたら、部屋に設置してある電話でご連絡ください」

「わかった」

「…では私はこれで失礼します」

ペコリと軽く礼をして去って行った。

「……………」

彼女が出ていくのを確認して、もう一度部屋を見渡す。

「…とりあえず、自分が住みやすいように整えるか」

仕事の為にも、今後の為にも、必要なことは初めが肝心だしな、そう考えながら鞆から道具を取り出す。

ノートパソコンとその他の付属器具、大型の無線機に、小型の衛星通信機を取り出しながら持ってきたものを確認し、机の上に設置していく。

設置が終わったら、次は所持している武器の確認。
いま持っている武装は…

- ・グロック17
- ・イングラムM11
- ・ベレッタM93R
- ・KSVK12.7
- ・00-XM109βノトロンベ

…だけだ。

まあ、これだけあればどんな相手にも後れは取らない。
麻酔弾と暴徒鎮圧ゴム弾もそれなりに持ってきているため、今は弾数の心配もない。

武装の確認を終えた後、資料の点検に取り掛かる。

「ええっ…と、護衛対象の確認…っ」と

実はここに来るまでだれの護衛にあたるかは知らされていなかった。なんでかと言うと、あのバカが『それは現地に行っただけのお楽しみ』

などといって、護衛対象に関する情報を教えなかったからだ。

「さて、どんな奴なんだ」

探し出した資料を手にとって見てみる。

「……………ん？」

*護衛対象（護衛目標）

名前：白鷺優衣しらぎ ゆい

年齢：17歳

学業：私立帝栄学院高等部。 2年A組

名前：琴峰奏ことみかねで

年齢：17歳

学業：私立帝栄学院高等部。 2年D組

二人ともかなりの美人だった。

……………いや、そうじゃなくて……………護衛対象が二人もいる？

「二人もいるなんてきいてねえぞ」

これは予定外だった。

なんせ対象者は一人だと思っていたからな
あいや、それ以前にあり得ないだろ…あのバカが…

「…とりあえず、確認だ」

小型の通信機を取り出し、本部に確認を求める。

【トルルルルウ……カチャッ】

『ドモドモ…こちら、本部のすが「おい、頼むから死んでくれないか？」初っ端から毒舌！？ 酷くない！？』

うるさい、誰のせいだと思っている。

「詫びる気持ちがあるなら死んで詫びろ」

『非道な…私は朱鷺君をそんな子に育てた覚えはありませんぞ！』

「俺もあんに育てられた覚えはねえよ」

『くっ…口が達者になってきたな、朱鷺君』

…今の会話でどこら辺が達者になったというのだろうか、普通に答えただけだろ。

「それよりも、だ。これはどういうことだ」

『……これとばなんだい？』

「とぼけるな、対象者が二人もいるって聞いてない」

『あれ〜？ そうだったかな〜』

「……………」

こいつマジでムカつく…

『まあ、朱鷺君なら大丈夫でしょ』

「大丈夫じゃねえよ！ 同じクラスとかならまだしも、違うクラスの人間を同時に見張れるわけないだろ」

『見張れるでしょ、朱鷺君なら』

「…………その根拠のない自身はどこからくるんだ？」

『う〜ん…………勘？』

「馬鹿だろ」

こいつ、一辺死ねばいいのに。

『そうかい？ 朱鷺君ならできると思っけどなあ〜』

「…………それより」

『まあ、朱鷺君の言うことも一理ありだから…………とりあえず、明日にでも一人補給に行かせるよ』

「助かる」

『じゃ、また定期報告の時に〜チャオ』

「…じゃあな」

【ピッ】

「まったく、俺の仕事を増やしやがって…はあああ…」

これから先が思いやられる。

ミッション03：迷惑な補充

Mission:03

——あれから次の日——

まだ朝日が見えない時間帯、つてか真夜中の午前3時。
それは突然やって来た。

【ドガン!!】

ドアが吹っ飛んだ。

「のわッ!？」

外れたドアはこっちに向かって飛んでくる。

飛んできたドアを横に動いて回避して、枕元に置いてあつた銃二丁
を取り出し構える。

「誰だッ!!」

ドアの方を見つめながら、相手を見据える。

人の影……それも子供だろうか、手に大きな鞆を持っている。
その人影はこちらを見つけると同時に…

「お久しぶりです、先輩！ 呼ばれて登場しました風見 響かざみ ひびきです。
よろしく願いしますね!!」

「……………」

……………。

「さて、寝るとするか」

俺はなににも見ていない。
きつと疲れがたまっているだけさ

「…先輩、現実を受け入れてください。僕ですよ響です」

「……………はあ…」

受け入れがたい現実だったのに…

「あれえ？先輩、反応薄いですね、どうしたんですか？」

「…いや、なんでも」

よりもよつてお前かよ、響…

「いやー、先輩とコンビ組むのって久しぶりですね」

「…そうか？俺はそうでもないぞ」

俺の中では響とはもう組む予定はなかったし。

「なに言ってるんですか。一年ぶりじゃないですか」

「そうか、一年ぶりか…」

俺の平穩は一年間だけだったのか……

「…なんでそう嫌そーな顔をするんですか」

「当たり前だ」

響と組んだらロクなことがない。
いや、なかった。

「まあまあ先輩。そう嫌そーな顔をしないでください。どーせもう決定しているんですから」

「五月蠅い。黙れ。低身長童顔少年」

「ヒドッ！？先輩酷いですよ！！人が気にしていることを……」

そう、響は身長が低い。

本人は160cmあると言っているが、実際は156cmしかない。
それに顔は……かなりいいんだが、どう見たって女にしか見えない。

「先輩、僕はまだ成長期ですよ！きっとこれからメキメキと……」

「成長しないだろ」

そう、多分……いや、確信できる。

響は成長しないだろう。

現に…

「響、お前一年前とほとんど変わって……」

「それ以上は言わないでください！！　僕は認めたくない！　認めたくない！！！！！！！！！！」

「……………」

哀れ現実逃避。

自分でも自覚していたらしい。

「あ、そうだ。いまさただけど、お前なにしにきたんだ？」

「先輩、人の話を聞いてなかったんですか？　最初に言ったとおり、人数補充ですよ」

「補充…ああ、あのバカに頼んでいたことか」

それで響が来たってことか。

「…お前が補充？」

「そうですよ」

「…心配だ」

腕は確かだし、任務は確実にこなすだろう。
が！　響は見た目と中身が同レベルな奴だ。

どう考えてもロクなことをしない、その対象が俺になるだろう。
明らかに人選ミスだ！

「……もう寝る」

余計なことは明日……ってもう今日か、なら起きてから考える。
もう、寝たい。

眠たいし、ダルイ。
布団の中にもぞもぞと移動する。
これで俺の安眠は確保。

「先輩、先輩。僕も眠たいです」

…俺の安眠を邪魔する奴がいた。

「……お前のことなんて知らん。テキトーにその辺で寝ろ」

「分かりました」

「そうそう……って！俺の上に寝るな！ウゼえよ！？」

「えーっ、だって僕の敷布団ないじゃないですか」

「畳で寝ろ！」

「嫌です。それに久しぶりに先輩で遊びたいです」

「…おい、今、お前なんか変なことを……って乗るな！押しつぶすな！布団ごと俺を丸めようとするなボケ！！」

そんなこんなで、眠ろうとしたころには朝日が見えていたという。

ミッション04：作戦会議

Mission:04

結局、あまり寝ることが出来ず、かといっていまから寝るのもあれなので、少し早いが作戦会議をすることにしたのだが……

「これはどう言う事だ？」

響に持たされた任務内容を見た瞬間、俺の護衛任務の計画内容が予定と比べ大幅にずれた。

「響、これは間違いなく任務内容なんだな？」

「さあ、僕は知りませんよ。ただ先輩にその紙を渡せとしか言われてませんし」

「なるほど、な」

となると、これが任務内容という事は間違いない。

……………けどなあ。

「なんで俺が執事にならなきゃいけないんだ？」

そう、響がもってきた書類には俺と響が護衛対象の執事として登録されていたからだ。

「その方が護衛しやすいと上は判断したんでしょうね」

その理屈はなんとかわかるのだが…

「……無理難題を言うな、ホント」

俺は執事なんて経験はないぞ。

「僕は少しありますよ」

「お前と俺を一緒にするな」

ってかなんでお前はあるんだよ。

「僕はほら、元々そう言った場所にいましたから」

「……そうだったな」

お前はそういった方面の専門だったな。

「それより先輩、どうするんですかこれ」

「……そうだな」

護衛対象のそばで常に張り付いていられるという点で言えば、かなり特と言えるだろう。

……が、執事という職業に関して俺は全く知らない。そもそもそう言った世界とは別だったからな。

「まあ先輩なら大丈夫だと思いますよ」

「……その根拠はどこからくるんだ？」

「ほら、先輩はなんだかんだいって尻にひかれ——」

【ガッン】

「殴るぞ」

「……先輩、もう殴ってますよ」

涙目になりながら軽く睨まれた。

「お前が余計な事を言うからだ」

「だって、事実じゃないですか」

どこがたよ。

「俺は女と付き合った経験なんて一度も——」

「………迫られた回数、13回」

「なっ!？」

「……引き抜かれそうになった回数、8回」

「ちょ!？」

「………拳句の果て——」

「おい! ちょっと待て!!」

「どうかしたんですか先輩？」

「な、なんでお前が！？」

俺の黒歴史をしってるんだよ！

「なんで知ってるか本当に知りたいですか？」

「…………遠慮する」

なんか聞いたら聞いたで怖い。

「それにしても…先輩も大変でしたね」

なんでそんな可哀相な者を見る目で見てるんだよ。
逆に悲しくなってくるわ。

「そもそも先輩は自分の事に関して無頓着すぎなんですよ」

「…はあ？」

お前はなにをいってるんだ。

「俺に興味を示す奴なんてお前ぐらいだろ」

「じゃあ、なんで迫られたり、引き抜かれそうになったりしたんですか？」

「逆恨みだろ」

「……………はい？」

目を丸くする響。

「先輩、先輩。今なんと？」

「だから逆恨みだろ」

俺が送りとどける途中で不快に思ったり、ヤバい人物に見えたりしたんだろうな。それか怪我をさせちまったのかもしれん。だから俺を組織から連れ出そうとして仕返しに……

「ってなんでそんな呆れた表情をしてるんだ？」

「先輩がものすごく鈍いんだなあって改めて自覚しただけですよ」

「はあ？ 鈍い？ 俺が？」

俺は狙撃屋だぞ。鈍くて狙撃が務まるか。

「……………今の先輩に色々言ったって意味がないですね」

「よくわからんが、バカにしてるだろ」

「だって『ヘタレチキン』としか言いようがないですもん」

「失礼極まりないな」

真顔でなんて事を言いやがる。

「ま、ともかく、先輩なら執事も大丈夫って事ですよ」

「なんかいい加減だな」

そんなんで本当にいけると思ってるのか

「大丈夫ですよ（多分）」

「……今、多分とか思っただろ」

「気のせいですよ」

「……はあ……なんか疲れる」

精神てきに疲れる。

なんで任務に就く前からこんなに疲れなきゃならんのだ。

「それはほら、先輩だから」

「……………理不尽だな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7791f/>

僕とお嬢のベタスト物語

2010年10月22日00時42分発行